広域的な連携で「守る」心を育む

越河地区地域合同防災訓練

越河地区では、震度6弱の地震で越河8区と10区を分断するような土砂崩れが発生したとの想定で訓練を実施。越河公民館には、8区と10区以外の住民、南中学校には、8区と10区の住民（各区5人程度）が避難した。

越河公民館では、避難所開設・運営訓練と消防署による救出訓練・初期消火訓練を実施。南中学校では、地域合同総合防災訓練と消防署による救急救命訓練のほか、生徒たちを保護者に引き渡す訓練も行われた。

越河地区はすべての自治会が平成17年から18年に自主防災組織を結成。平成18年8月には、災害時は自治会を越えた連携が必要と、越河地域振興会自主防災連合会が組織された。

同連合会では災害時に、行政による「公助」、自分の身は自分で守る「自助」、地域や身近にいる人どうしが助け合う「共助」が大きな力になると、毎年、さまざまな訓練を実施。自分、そして家族、近隣と、守る範囲を広げ、地域における協力体制の必要性などを、繰り返しの訓練の中で呼び掛けている。

1_避難者受け入れ訓練を行う生徒たち　2_落ち着いた表情で避難所となる体育館に移動する生徒たち　3_テント設営を行う生徒たち
4_消防署による救急救命訓練　5_災害危険情報を確認する参加者　6_各避難所に配備されたプライベートテント（男女別の更衣室）

Interview

訓練に参加した越河地域振興会自主防災会の古山忠喜会長と南中学校の山本玲校長に感想などを伺った。

越河地域振興会自主防災会長
古山（ふるやま）　忠喜（ただよし）さん

越河では平成17年から18年に、全地区で自主防災組織が結成されました。結成以来、自主防災組織が、市の防災訓練に関（かか）わらず、独自に訓練を行っています。こうした取り組みもあり、自主防災組織単位で一時避難場所に集まってから公民館に避難する体制が整っており、地区民の防災意識が高いということが越河地区の特徴だと思います。

今回の訓練では、「越河地区避難所開設・運営訓練準備委員会」を開催し、越河公民館で消防署による救出訓練・初期消火訓練や、備蓄品を展示し、実際にふれてもらいながら、備蓄品の必要性を呼び掛けました。また、南中学校で地域合同総合防災訓練と消防署による救急救命訓練を実施しました。

越河地区では、市から提供される備蓄品のほか、独自に防災備品の整備を行ってきましたが、今、問題も発生しています。それは、備蓄品を一括で保管する場所がないということです。せっかく集めた備蓄品を、公民館の空きスペースに点々と保管していたのでは、有事の際のスムーズな活用が懸念されます。これから地域の人たちと話を進めていこうと思っていますが、備蓄品を1箇所で保管する倉庫を作りたいと考えています。

それから、越河地区もほかの地区同様、高齢者の比率が高く、高齢者だけでは避難所開設・運営には限界があるということです。越河地区に住む若い世代と協力することや、越河小学校、南中学校と連携し、絆を深めていくことが大切ではないかと思います。今後ともいざという時に備えて、地域を挙げて取り組んでいきたいと考えています。

南中学校長
山本（やまもと）　玲（あきら）さん

今回の訓練は、大きく4つのねらいがありました。

1つ目は、子どもたちが登下校時のそれぞれ異なった状況の中、まずは自分の身を守る「第一次避難」ができるかというものでした。

2つ目は、メール発信を保護者に行って、生徒を保護者に無事に引き渡せるか。自宅から学校まで距離があるという地域性を考慮し、実施しました。

3つ目は、震災の時に私は、石巻市の学校に勤務していたので、避難所運営の大変さや、地元の中高生の思いがけない活躍などを目にしてきました。中学生として自分たちの安全確保ができた次は、人を少しでも支える心を学んでほしいと考えています。

訓練では、地域の方々とうまくコミュニケーションがとれていて、生徒たちは大きなものを得たのではないかと思います。災害時は、訓練のように筋書き通りの動きはできないと思いますが、意識付けはできたのではないかと思います。

4つ目は、「自分は地域の一員」という自覚を持ってもらい、時と場合によっては、地域とともに一緒に行動するという意味を、生徒たちに分かってもらいたかったのです。その点も、少しは感じることができたのではないかと思います。

生徒たちは予想以上に、真剣に取り組み、実効的訓練が実施できました。大事なことは、生徒たちも教師も、今回の訓練をきちんと振り返って課題を焦点化し、今後に生かしていくことが大切だと考えています。

震災を石巻市で経験しましたが、実際に自分が体験したかしないかで、とらえ方は違うと思います。まして3年が過ぎると教訓がだんだん薄れてしまい、危機意識も低下してしまいがちです。どのように後世に伝えていくのかを生徒たちに考えさせるのは難しいとは思いますが、教育現場では、教科と同じように、防災教育が重要視されており、生徒たちが防災について学ぶ機会を継続的に設定し、その都度意識付けを絶やさないようにしています。

避難所運営は、行政主導であるべきとの意見もありますが、やはり、地域のリーダー、消防団の方や地域のお世話役のような方が、いかにその地域をまとめるか、リーダーシップをとるかということの重要さをまざまざと感じています。

石巻市の避難所では、避難所ごとに対応が違いました。行政サイドの対応だけではなく、その地域にリーダー格の人物がいるか、どう育てるかが大事だと思います。後は、その人たちと一緒に学校や生徒が、同じ目線で大変な部分を切り開いていくことの大切さを痛感しました。そういった意味でも、今回は、地域の方々、消防団の皆さん、生徒が一緒になって訓練できたので、大変有意義な合同訓練となりました。

今後、災害が発生した場合の学校の対応としては、マニュアルも大事ですが、時と場合によっては、マニュアルを横に置いてでも、その状況で、生徒たちの尊い命を「何が何でも守る」という判断が大事だと思います。その判断をどのタイミングで行うのか、我々教職員が日々、防災教育・減災教育について研修を深めなければならないと思います。

そして、生徒自身が自分の命は自分で守ることが一番大切。それができた後で、困っている人がまわりにいたら、少しでも支えてあげたり、豊かな心を分けてあげたりという気持ちを持った生徒を育んでいかなければならないと思います。勉強は大切ですが、「豊かな心」と「生きる力」、これがとても大切だということを私は震災を経験し、考えさせられました。

生徒たちが、20歳、30歳、40歳になった時に、自分、自分の家族をどう守っていくかということにつながっていくと思います。

学校としても、その場その場で適切な自主的行動ができる生徒や教師を育てていくことが大事だと思っています。